
パ！

かつおだしうめえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パ！

【Nコード】

N3293Y

【作者名】

かつおだしうめえ

【あらすじ】

——アクションパズルゲームを使った熱い戦いが幕開ける…！
要するにパズルゲームと女の子キャラで販促アニメっばいことするよ。

1 明日を夢見て借金返済！？ ― 1

とりあえず日本。あとはどうでもいい。

どこにでもありそうでどこにもない街、はする葉須留市。

この街は挑戦者でいっぱいだ。

塔が二つ、建っていた。

高く限界のふちに達するほど緻密に、一見無意味に積み上げられた部品。だが価値がないと判断する者は愚かな者だ。

これほど狂いのない計算の元に作られた芸術品はあるだろうか。

いや、ない。

塔を前にして戦っているのは少女と少年。

少年は若い。身に纏っている学生服がそれを主張している。

だが少女は彼よりも若く小さかった。胸もなかった。ツルペタだった。かろうじて中学生だとわかるのは近所にある中学校の制服を着ているからだ。長いポニーテールをリボンで結んだ元気そうな娘だ。

ほんの少し前、勝負を挑んできたのは少女の方だ。

少年は最初は断った。外見からどう考えても実力は自分より下、熱い戦いはのぞめそうにはなかったからだ。

だが「お兄ちゃん、ぼくと戦うのいや……？」とうるませた瞳で見上げられちゃ断れないだろう。あぁっばくつこばんざい。

「——きたっ！」

ポニーテールの少女の目が何かに反応した。

天に新しい部品が鎮座していた。その部品が今、塔の上に降り落ちようとしている。これ以上塔の上に何かが積み上げられれば全ては無に還し、少女の敗北は決定するだろう。

——だがこれこそが、この一つこそが、少女が待ち続けた部品だった——！

「いづくよおーっ！」

少女の叫びと同時に部品は加速して塔の上に降り落ち、そして碎けた。

碎かれた塔の破片が新しい部品となつてまだ残る塔の残骸へと降りそそいでいく。

「よーし四つ目！　そして五つ目の連鎖だ——っっ——！」

視界に広がる閃光、そして爆発。爆発。爆発！

爆発と共に少年の塔にも新しい部品が降りそそいだ。こんな部品は望んでいない。こんな大量の部品、さばきれるものでもない——！

「ば、馬鹿なっ！？　こんなに早く積めるヤツがこの街にいるなんてっ！？」

これ以上攻める、いや守り続けるのは無理だ。

頭で考えるよりも先に反応した少年の体が膝をついた。塔の限界とともに少年が今まで積み上げてきた功績、勲章、経験、様々なものが白く粉々に碎けていく——。

——YOU WIN！

少女、梨矢なるのホログラムディスプレイに勝利の単語が並んだ。

「やったー！　ぼくの勝ちだよっ！　ぶいっ！」

「す、すごいですなるちゃん……！　今の高校生のおにーちゃんですよ……！」

なるが着ている制服と同じデザインのものを着た少女が駆け寄ってきた。

鹿島ゆうひ。少しくせのついた髪を肩までのばした少女だ。

ゆうひは呆然とし続ける高校生のお兄ちゃんに向かって少し照れながら笑ってくれた。敗北のくやしさも忘れて高校生は顔をだらっ

とさせた。

「今のでどれくらいたまったかなあ〜？」

リストバンドについている携帯電話のような端末を動かすなる。
ホログラムディスプレイに浮かんでいた勝利の文字がなるの現在の
ステータスを表示した。

N A R U N A S I Y A

S C O R E 2 0 0 0 p t

「おおっ五十ポイントもたまっちゃったよ〜！ やっぱり高校生の
お兄ちゃんレベルが高いからポイントもがんがん稼げちゃうねっ」
満足そうになるはにっこり笑って端末のボタンをいくつか押して
ホログラムを消した。

「じゃーね、そこそ強いおにーちゃん！ またぼくと戦ってね！」
なるとゆうひ、中学生女子の二人は手をぶんぶんと振りながらあ
っという間に少年の前から去っていった。男子高校生はいつまでも
顔をゆるませたまま手を振り返していた。

君の未来はいろんな意味で暗いぞ。

大人も子供もおねーさんも！

今この街、いや日本、いや世界では一つのゲームが流行ってい
る。

『ワールド・パラドックス（略してワーパラ）』

ジャンルはアクションパズル。そして超巨大なネットワークゲー
ムでもある。

腕に小型の携帯端末をつけることによりいつでもどこでもゲーム、
そして対戦が可能。対戦成績は常に端末からゲームサーバーに送信
される。課金製ではあるが月にジューズ三本ぶんのお値段だから小

さい子供にも大人気だ。

……様々なルールはおいおい説明するとして。
戦いから去った二人がどこにいるかというところ。

「はあ、やっぱりかわいいよ、あの特製にゃんこベルト……う
つとり」

街のショーウィンドウにべったりとなるは貼りついていて。ちょ
っと目つきがヤバイ。

「な、なるちゃん、いつガラスとちゅーするんですか……？」

「にやっ、しないよ！？ 注意ありがとっ」

ゆうひの言葉になるは慌ててショーウィンドウから離れた。なぜ
か小さく舌打ちするゆうひ。「間接キス……」なんて呟いたのはな
るには聞こえなかったようだ。

ショーウィンドウの中には時計や財布、きらきら輝くネックレス
が並べられていた。アクセサリーシヨップかと思いきや店の中には
スノーボードやブランド服、変わったところではハムや城の模型が
飾られている。

そしてさっきからなるが目を輝かせながら夢中になっていたのは
ネコ型の特製ワーパリストバンドだ。

実はこの店、普通の店じゃない。

ここで使える通貨は円でもドルでもマツカでもない。

なんとワーパラで勝つともらえるポイントこそがこの店の通貨だ。
どんな高価な物でも勝ち続けてポイントをとめれば誰だって買うこ
とができる。この店がワーパラの人気の理由の一つでもある。

まあつまりはどんなに価値がないように見えてもこの店じゃポイ
ントがなければ買うこともできないわけ……。

「……………はあ」

なるはネコバンドの下にある値札ならぬポイント札を見てため息
を吐いた。

さつき表示されたなるのポイントは二千。つまりなるのポイントのちょうど二倍。

「で、でもあのネコさんベルト、どうしてあんなに高いんでしょうか……。あっちの時計の方が高そうですよ……」

ゆうひが指差した時計は五百。普通の店だと二、三万円はしそうだ。

「そんなことないよ、すっごくかわいいよ！？ めろめろきゅんだよ、ネコちゃんかわいいよ！ ……ハア！ネコちゃん欲しいよお」

「わ、私はなるちゃんにめろめろきゅんです……」

だがもちろんなるは聞いていない。

「……でもさっきのでレベルがあがっちゃったんだよね……ぼくより強い人を探しに行かないと……」

「レ、レベルがあがると弱い人相手にしてもポイントが少ししかもらえませんからね……も、もうなるちゃんよりレベル高い人ってこのへんにいないんじゃない？……」

「にやうーそうなんだよ。早く世界中の人と戦えるシステム追加されないかなー」

ネットゲームではあるが、今のワーパラは近距離対戦しかできない。世界中の人間と対戦できる新システムのワーパラ2はただいま絶賛開発中です。

「せつ、説明的なセリフはここまでにしておいて……」

メタなことを口走るゆうひがごそごそとカバンの中を漁り、携帯電話を取り出した。

「わ、ワーパラ2はまだだけど、こんながあるんだって……」

ゆうひは携帯のボタンを操作してどこかのサイトにつなげた。画面を見せられたのであるも一緒にのぞきこんだ。

「えっと、ワーパラフェスタ？ ふーん大会やるんだ」

なるは子供にもわかりやすいように大きな文字で書かれた文を音読した。

ワーパラフェスタ開催！

主催：ワーパラ開発チーム 共催：貴宝院カンパニー

大人気のワーパラでみんなとバトルだ！

君の熱いワーパラスピリッツを燃やせ！

優勝賞金：一千万円

「賞金一千万ー！？ ワゴンにはいつてる中古ゲームがいくつ買えるんだろっ」

よりにもよってそんなもので換算してほしくないだろう。

「な、なるちゃんこの大会出てみたらどうですか……？」

参加をすすめるゆうひだが彼女の脳内には一つの妄想があった。

（わ、私のかわいいなるちゃんが大勢の人の前でバトル中のあんな姿こんな姿を見せるなんて……いつもは強いなるちゃんも大人の男の人の熱い視線に恥ずかしくてうまく操作できないの。そして涙を浮かべてがんばってるうちにいつしか恥ずかしさが快感になって、くやしい、でも感じちゃう……！）

ゆうひは自分の妄想にびくびくと打ち震えた。

「ゆ、ゆうちゃん、ヨダレ……」

「ハッ！」

なるに呼ばれ、ゆうひは現実に戻ってきた。そして取り出したハンカチで丁寧によだれをふいた。

「もー、そんなに興奮するくらいワーパラが好きならゆうちゃんが大会に出場すればいいのにつ」

「わ、私なるちゃんみたいに強くないです……なるちゃんは出ないんですか……？」

「うーん……ぼく人前で目立つの嫌いなんだよねー。それに今欲しいのってネコベルトだけだからお金じゃ買えないし……あ、でも強い人が大会に出るなら！」

「うん！」

拳をぐつと握りしめてゆうひはなるの答えを待った。

「大会が終わったあとに対戦してもらえばポイントが稼げちゃうよね！」

がくつ。

「……な、なるちゃんのせいで古い漫画みたいに転んじやいました……うん、でもなるちゃんらしいからいいです……」

「んじゃ、つよそーな人探しにいこー！」

だがその時であつた！

二人の耳に「や、やめてよ！ ぼ、暴力反対！ お金なんて持っていないんだからあ」という典型的いじめられっこの叫び声が聞こえた。

ポイント交換ショップ、の近くの路地裏。

路地裏という場所はきわめて危険な場所であり見知らぬ人間にストリートなファイトを挑まれるかもしれない場所だ。もちろん嘘だが、暗いから人目を避けやすいというのは一部の人間にとって都合がいいらしく、ゴミとチラシと糞ゲーの説明書が散乱する中、二人の人影がもめていた。

「お前さーポイントずいぶんためこんでるみたいじゃない？ それをちよつと交換してくるだけでいいのよ。俺の欲しいゲームと交換するだけでいいんだからさあ。たつたの千ポイントよ？ 親友としてのお・ね・が・いなんだぜ？」

ただいまカツアゲ中の不良とその被害者A。

親友としての『お願い』は相手を壁に追いつめながらするものなのか疑問である。

「そ、そんなことしたらまたためのすごく大変じゃないかつ」

律儀にうなずいておけばいいのに被害者Aは反抗の意志を見せてしまった。

「てめー生意気なんだよ！ いいから俺の言うとおりにしやがれ、ヒヤッハー！」

「こ、このポイントは明日への希望なんだー！」

あわや殴られてバンドごと奪われるかと思われたその時！

「そこまでだよ、世紀末モヒカン！」

路地裏に第三者の声が響いた。

「モヒカンじゃねーよ！！ 誰だ！」

路地裏の二人は声の方向を見た。そこには日の光の中に悠然と両腕を左上に構えるポニーテールの少女が立っていた。

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ！ 不良を倒せとぼくを呼ぶ！」

ゆうひが見ていたら「む、昔の特撮に影響されるなるちゃんかわいいよ……！」と鼻息荒くしそうだが今この場所にはいない。

「ぼくが負けたらポイント全部あげるよ！」

なるは自分のワーパラバンドを操作してホログラムディスプレイを表示した。そこに浮かび上がる二千の数字。なるのポイントだ。

「二千……！ ふひひ、いいぜやろうか……！」

不良はなるの姿を足の先から頭の先まで舐めるように見た。そして自分のワーパラバンドを操作して対戦の申し込みを受け入れた。

起動する二つのホログラムディスプレイ。

これから塔が積まれる予定のからっぽの箱だ。

今ここに戦いが始まるうとしていた。

「パラドックスバトル、スタンバイ！」

一方その頃。路地裏にいないゆうひは大通りの道を走っていた。

「……早く先生か警察の人呼んでこなきゃ……！」

動転しているせいか誰でもいいという選択肢は考えられないようだ。

『ゲームで勝負するからだいじょうぶだよ、ゆうちゃん!』

なんて言ってたけどゲーム以外で勝負されたらもちろん勝ち目なんてない。それどころか万が一あの不良に変な趣味があったら……

「ああっ、そんな! な、なるちゃんの若く健康的なみずみずしい肌に不良の荒々しい手が……! 制服は淫らに破かれて、いやっだめっなるちゃんのそんなところにはまだ触れちゃいけないのーっ!」

平日の午後、検閲されそうな言葉を口走る女子中学生が商店街を爆走していた。通りすがりの主婦達がいろんな意味で心配そうに見ていた。

妄想に夢中になっていているゆうひが目の前を確認しているわけもなく

ドンッ! ……ぱふっ。

「きゃうっ!」

誰かと思い切りぶつかるまでゆうひの爆走は止まらなかった。だが衝撃のせいで後ろに倒れる前にぶつかった誰かはゆうひの腕をつかみ、柔らかい肉球が二つ並ぶ胸元へと抱きよせてくれた。

「だいじょうぶか?」

凜とした声が優しくゆうひに問いかけた。

「あ、あなたは……!」

優しく包み込んでくれる感触にちよつとうつとりしながら、ゆうひは自分を抱きよせる長身の少女の顔を見上げた。

1 明日を夢見て借金返済！？ ― 2

さて改めて説明しよう！

このゲームは自分とレベルが同じか高い相手と戦わなければポイントがたまらない。

つまりポイントがたまってる相手はレベルが高い相手でもあり、姿かたちにはまったく関係ない。

更に説明するならば他人のポイントを当てにするような不良と賭けに使えるほどポイントがたまってるなるでは実力の差なんてわかりきったもので――

―― YOU WIN！

なるのホログラムディスプレイに勝利の単語が再び並んだ。

「よっわ……」

わかっていただけね。

それでもなるは思わず呟いてしまった。

勝利までのタイム、およそ十秒！ なんとなるの最短記録である。なるちゃんよりは弱いですが、と言っているゆうひだってこんなに早く負けたことはない。

「……く、こ、こんなガキに俺が負けるなんて……！」

「さ、負けたんだから諦めてどっか行きなよ」

「ふ、ふふ……」

突然笑い出す不良。ぎょっとしたなるは半歩だけ後ずさった。

「そんなことをする理由がどこにある？」

「え、だって負けたんだから……」

「そんな約束はしてねーんだぜ……！」

「にやうっ！ そういえばぼくが負けたときのことしか言っていない……！」

がーん！ と背景に白抜きイナズマを背負ってなるは衝撃を受けた。すっかり勢いを取り戻した不良はなるを指差して宣言した。

「次はジャンケンで勝負だ！ もちろん負けた方は脱ぐ！」

変態である。ロリコンである。おまわりさんここです！

「や、やだーっ！」

もちろんなるは叫んで拒否した。

「くくくくく、俺の脳内ではすでにイメージトレーニングは終了している。まずはスカート！ その次にスニーカー！ 靴下と髪の毛は最後まで残しておいてやろう！」

「そ、そんな格好しないもん！ ジャンケンでも勝つもん、絶対！ 逃げればいいのに。」

だがはじめて遭遇する変態という生物に、なるはどんな対応すればいいのかわからなかった。

「じゃあ俺の不戦勝だぜ、いや不戦敗でもいいっ！ ヒヤッハー！ 何を考えてるのか知りたくもないが不良が自分のベルトに手をかけたそのときだった！」

「そこまでだ、変態モヒカン！」

またも路地裏に響く声。鋭く凜とした正義の声が邪悪に染まった不良の心に刺さった。

「だからモヒカンじゃねーって！？ 誰だ！」

不良がまたも見た路地裏の先には二つの人影が立っていた。

長身に艶のある黒髪、細身なのに出るべきところはちゃんと出た体。高校生か大学生にも見えるが着ている服はなんと同じデザイン、つまり中学生だ。左手にはスポーツバッグ、左手には竹刀を携えている。

その後ろには顔を赤くしてはあはあと息を荒げているゆうひがいた。きつと急いで助けを呼んできたのだらう。そう思うことにしようよ。

「暴力を持って女子を穢そうだなんて言語道断、男子の風上にもおけん。だが私も鬼ではない。胴か箆手か面、好きなものを選べ」

手に持った竹刀を不良に突きつけながら長髪の少女は宣言した。
「どれも攻撃じゃねーか！　せつかくだから俺はこのおっぱいを選ぶぜー!!!」

両手をわきわきとのぼしながら不良は黒髪の少女に特攻した。さつきまでの妄想で頭が腐ったんだろ。

「なるほど、面が好みか」

ス、と少女は竹刀を正面へ構え、一瞬のうちに動いた。

スパアンツ!!

「あべっ!!」

竹刀の刀身が不良の額ど真ん中に下りた。

一斬、快勝!

「……………ぐえっ」

世紀末ヒヤッハーをたおした!　けいけんち1を手に入れた!

死んだカエルのように地面にうつぶせに倒れる不良。ぴくぴくと動いているから死んではない。

「えっと……………だ、だいじょうぶなのかな、この人」

「安心しろ、みね打ちだ」

ふ、と黒髪の少女は微笑んだ。美しい笑みだ。好みのタイプがぼくっこ貧乳のゆうひがぼーっと見惚れてしまうほどだ。ちなみに剣道は最初からみね打ちだからよい子は真似しないように。

(ち、違います!　わ、私にはなるちゃんという友達以上の存在がいるんですっ)

だがゆうひはその友達以上の存在を放置していたことに改めて気付いた。

「な、なるちゃん大丈夫!?　　だ、大事なものは取られてませんよね!?!」

「うん大丈夫!　弱かったから!」

「そ、そうよかったあ……………」

ゆうひはほっとため息を吐いて安心した。なるも友達に心配されて悪い気はしていないようだ。

二人が会話の食い違いに気が付かなくてよかった。

「ちょ、ちょうど近くに剣道部の橘さんがいたから来てもらったんです……」

「橘さん？　どっかで聞いたような……」

なるは黒髪の少女と手に持つ竹刀を交互に見比べた。

竹刀、そして橘。

「んー、だいぶ前にこの組み合わせ見たんだよね、どこだったかなあ……たぶん、校門の前で見たような……」

なるは二ヶ月前に校門に立てられていた看板の文字を思い出した。

『剣道部、橘あやめ　全国出場決定！』

「あつ、剣道部部長の橘あやめさんだ！」

だけどその看板は一週間ほどで消えてしまった。そのせいか生徒の間で特に話題になることもなかった。

「……えっと、ごめんなさい、ぼく名前は知ってたけど顔までは……でも助けてくれてありがとう！」

「いいんだ、結局行けなかったのだからな……」

どこか遠くを見る目でつぶやくあやめ。

その姿はさつき不良を倒したときに見せた気迫とは違う儚さを持つていた。

「行けなかったって……？」

「……君はワールド・パラドックスをやるのだな？」

なるの質問には答えずに、あやめはなるの左腕にはめられているワーパラバンドをちらりとながめた。

「うん、すっごく面白いよ！　あやめさんは……」

あやめの両腕には何もつけられてなかった。

「ああ、私はやっていない。少し興味があるだけだ」

「そうなんだ。でも本当に面白いからあやめさんもやったらハマるよ！　きつと剣道部の部長さんだから反射神経もいいんだろうなあ。」

ワーパラも強くなれるよ！」

ワーパラはパズルゲームだ。

必要な能力はいろいろあるがそのうちの一つは反射神経。

だからさつき不良を倒したときのように一瞬のうちに状況を判断できるなら強いに違いない、となるは考えたわけだ。

「私がか？ 君に言われるとなんだか本当にそう思えるな」

「えへへ、そうかなあ？」

「さて、あまりこんなところにいるとまた変な奴に絡まれてしまうからな。私が家まで送ってやろう」

「ありがとう！ あやめさんってすつごく美人で（おっぱい大きくて）強いんだね、まるで白貫唯みたいだっ！」

「……誰だそれは？ だが褒めてくれるのはうれしい」

「白貫唯ってのは餓狗神話っていう格闘ゲームに出てくるキャラで」

三人の少女達はきやつきやうふふと楽しそうな会話をしながら（しかし話題はレトロゲーム）路地裏から去っていった。

「じゃ、じゃあ僕もそろそろ……」

すっかり存在が空気になっていた被害者Aもこっそり立ち去ろうとしたが……

がしっ

地面にのびたままの何かに足首をつかまれてしまった。

「くくくく、友達を見捨てたりしないよねえ？」

「ひ、ヒイ——ッ——！」

路地裏に叫び声が響いた。が、少女達はすでに遠くへと消えた後だった……。

ま、いつか！

月日のたつものは早くて……うん、ちょっと違う？

あつという間に夕方。

らあめん、と書かれた赤いのれんが風にゆれていた。準備中と書かれた看板はさつき営業中に変えられたばかり。中からは醤油と鶏がらのおいしそうなスープの匂いがした。

「ありがとう！ まったねー！」

店の前まで送ってくれたあやめに、なるは手をふって見送った。そしてのれんの下の扉を横にガラガラと開けた。

「いーちしゅうら」

「ただいま！」

実は、というわけでもなくここはなるの家でもあったりする。

「あ、なるちゃん！」

客にラーメンを運んでいた女性、なるママはお盆を放り投げ（客がキャッチ）すぐさまなるへと駆け寄った。

「ああ、つかえり私のかわいいなるちゃんなるちゃんなるちゃんなるちゃんなるちゃんなるちゃんなるちゃんなるちゃんなるちゃん！！」

すりすりすりすりすりすりすり！！

なるママによる頼ずり攻撃！ なるのMPが奪われていく！

ちよつと引き気味になりながらもなるはママを押し返した。

「ま、ママ帰ってくるたびに頬ずりするのやめてよお、ぼくもう中学生だよ?」

「そうね、
 パパのぶんも残しておかなきゃねっ」

「パ、パはお仕事中だからいいんだっ！」

「左のほつぺたがさみしいなら今から飛んでいくぞ！」

「パパやめて！ カウンターを飛び越えようとしなさい！」

店主が酢醤油やらコシヨウが並ぶカウンターを飛び越えようとしたりせいで客の一人がぶっつと吹き出した。

……さて一息。

学校指定のカバンを空いた椅子に置き、なるはカウンターの片隅でお冷をこくこくと飲んでいた。

「えっへへへ、なるちゃん、じゃーん」

やけにわくわくかしたママが一枚のチラシをなるの目の前に広げた。そこに書かれている文字は『ワーパラフェスタ』、文面もさつきゆうひの携帯で見たものとほぼ同じだ。

「ねーねー、なるちゃん、これに出てみるつもりなあい？」

「ワーフェス？ 別にいいよお」

ゆうひに言っただけと同じ答えを返すなる。

「だって賞金一千万なのよ？ これだけあつたら世界一周旅行にも行けるのよっ」

「ぼく英語の成績悪いから行きたくない」

「お小遣いだって増えるのよ？」

「欲しいものってネコベルトだけだから今のお小遣いで満足してるよ」

「……うっゲームのキャラに影響されてポニーテールにして『ぼく』なんて使いはじめてるくせにゲーム大会に興味ないだなんてっ」

「うっ。お、大勢の人の前に出るのが嫌なのっ！ そ、それに一万なんてもらっても使い道ないじゃん。うちはそこそこお客さん来てるし。うちが困ってるならがんばってもいいけど違うもん」

なるは首をぷいっつと横に向けてワーフェスのチラシから視線をそらした。子供にすねられてしまい、ママは目に涙を浮かべ、口をぷくつとがらせた。

「むっむぶぶぶぶぶ」

「ほっぺたなんかふくらませてでも出てあげません！」

どっちが保護者なのかわからないぞ。

「……世界一周旅行」

「行きたくないっ！」

しつこいママの声から逃げるために、なるは耳を両手でふさぎな

がら店の奥、自分の部屋へと入っていった。

「うふうー、なるちゃんのいじわるうう」

だがママの声はなるには聞こえなかったようだ。

「……………はあー」

大きくため息を吐くママ。

しつこくして娘の気持ちを傷つけたことを反省しているのかと思いきや

「うちが困ってるならかあ。ねえパパあ、一ヶ月くらい休んでみない？」

とカウンターの向こうで麺の水切りしているパパに話しかけた。

「無理だよママ。お客さんが心配して連絡してくるよ。それに一ヶ月くらい休んでも困ったりしないよ。うち他にも店出してるもの」

「うーん……………じゃあ」

カウンターをはさみながら二人は奥の娘に聞こえないようにひそひそと話し出した。

「あの、俺のラーメンはまだですか……………」

客の一人がつぶいたがもちろん二人は聞いちゃいなかった。

『夕方のニュースです。今朝九時、国際ネットワーク管理サーバーに何者かがハッキングした記録が残されていました。自動セキュリティAI【エヌリス】の報告によると犯人はシステムの改ざんを何度も試みたようです。サーバーに異常はありませんがIPCOはこの犯人を国際的に指名手配にすると同時に……………』

店にあるテレビでは今日の事件を淡々と流すニュースキャスターが映っていた。が、次の瞬間には『今日のにゃんこたん！』なる人氣コーナーに変わっていた。夕飯を食べるために部屋から出てきたなるが箸を握りしめたままテレビに心を奪われた。

「ねえ、なるちゃん」

「出ないんだからねっ！」

テレビを見たままなるはママにぴしつと言いつつ切った。

「パパア」

ママがパパに涙目で助けを求めてもパパは苦笑しながら首をふるだけだった。

そして夜。

誰もが寝静まった時間。

もちろん健全な中学生のなるも例外ではなく、ネコのぬいぐるみを抱きしめながらむにゃむにゃと何かを呟いていた。——いや、うなされていた。

なるは夢の中で誰かに呼ばれていた。

『……お願い、助けて……』

「だ、誰？」

きよろきよろと周りを見ても誰もいないし何もない。ただ霧の中にぼんやりした世界が続いている。

『助けて、このままだと世界が壊れてしまうの、お願い……！』

必死に助けを求める女性の声。なるは自分に呼びかけているのかと思った。

でも少しだけ様子が違う。

『誰か、お願い、この声が聞こえているのなら……』

自分の声が聞こえる誰かを探している、そんな感じがした。

『お願い……』

だんだんと小さく遠くなっていく声。

「ま、待つて！ きみは誰？ どうして助けてほしいの？ 世界が壊れるって……」

なるは叫んだ。聞こえないだろうと思っていた。だがその瞬間、霧が晴れた。

無数の細いイナズマが走る黒い空間、天も地面もなく無限の距離だけを感じさせる不思議な世界に白い服を着た女性が立っていた。自分の身長よりも長く美しい髪 of 女性は涙を流していた。

「泣かないで……」

いつの間にか女性の前にいたなるはそんなことを言っていた。

『あなたは……？』

「ぼくは……」

なるは自分の名前を言おうとした。

「……にやふ？」

だというのに気付いたら黒い不思議な世界から自分のベッドに戻っていた。しかも半分ずりおちそうになりながら。

「女の人は……？」

言いかけてやつとなるは気付いた。

夢です。明らかな夢オチです。

そのことに気付いたなるは

「にや、にやう~~~~~!!」

枕に顔を埋めてじたじたと悶えた。安心しろなる。君はまだ中学生、そんな夢を見てもおかしくない年頃だ！

「げ、ゲーム脳じゃないもん！」

誰も言っていない。

1 明日を夢見て借金返済！？ ― 3

次の日になり、何か物言いたげなママの視線に回避コマンド入れながらなるはいつものように登校した。というかちよつと遅刻しそ
うだった。

かといって別にパンをくわえながら「遅刻遅刻」なんてやった
わけじゃないぞ。

「ふー、間に合ったよっ」

「あ、な、なるちゃん、おはようございます……」

教室に駆け込むと一番先にゆうひが挨拶してくれた。

「うん、ゆうちゃんおはよー！ みんなもおはよー！」

元気のいいなるはクラスの人気者だ。そしてゆうひはそんななる
の隣の席だ。

クジで席順を決めたとき、本来隣になるはずだった男子からクジ
をもぎとったのは秘密だぞ！ なる以外のみんなは知ってるけどね！

「あ、あのですね、なるちゃん。今日、転入生が来るかもしれない
んですって……」

今朝クラスで最もホットな話題をなるに伝えることこそゆうひの
仕事でもある。

「転入生？ 今日ってそれまで誰も知らなかったの？」

「な、なんか結構急に決まったって。せ、先生達が話してたそうで
す……」

「ふーん……あ、先生来たよっ」

なるの言葉にががやと自分の席に座りだすクラスメイト達。な
るも同じように席につく。

まだ静かになっていないうちに教室の扉はがらつと開いた。

「みなさんおはようございまぁーす」

髪をひとつにまとめて大きな眼鏡をつけた女性がのんびりと挨拶
をした。下着はつけているはずなのにバレーボールのような大きな

胸がぼよんと揺れた。

そのまま教壇まで歩いていこうとしたが

安全のためにつけてないはずの扉の敷居にさっそくつまづいた。

「きゃあああつ」

そのまま前に転がりながら教卓の面に頭をぶつけ、教卓のはしっこに置いていたチヨークの箱が頭の上に逆さに落ちた。

平凡な日常にたった一人でブービートラップを巻き起こす高村よ

ーこ先生、通称

「一人影城……！」

【影城】
かげじょう

森の中の古城に忍び込もうとする侵入者達を数々のトラップで撃退するゲーム。

ただし十年以上前のゲームだからこんな通称で呼んでるのはレトロゲームマニアでもあるなる一人だけだ。

「そ、それは通称とは思えないんです……」

ゆうひのメタな突っ込み！

「え、えつとお、今日は皆さんに新しいお友達を紹介しまあす」

頭にチヨークの箱を載せたまま、よーこ先生はふらふらと立ち上がった。

「それでは貴宝院さん入ってくださいーい」

開けっぱなしになっていた扉によーこ先生は呼びかけた。

——その瞬間、教室の光という光が失せた。

「え、ええっ朝なのはどうして窓の外までまっくらなの？」

急に天気が悪くなったわけじゃない。

窓の外には一面の暗黒しか見えなかった。まるで一瞬のうちに遮光カーテンを教室の外に張られてしまったかのようだ。

「お、落ち着いてください、皆さん！ 机の下に隠れてハンカチを口にあててくださいーい！ きゃ、いたあい」

「先生が一番落ち着いてないよ！　どのトラップを発動させたの、先生！」

「な、なるちゃんだいじょうぶ！？　こ、怖かったらしがみついているんですよ？　怖くなくてもしがみついているんですよ？　それとも暗闇でこっそり、うふふ……」

「ゆうちゃんも落ち着いてよ。でもどうして暗くなっただんらる？」

左腕にゆうひをまとわりつかせながらなるは考え込んだ。きゃあきゃあ他のクラスメイトも叫んでいる。

いきなり教室を襲ったあんこく。どの騎士が放ったかは知らないが生徒達がこんらん状態になる前に次の変化が訪れた。

暗い教室に一すじの光が現れ、教室の入り口を照らしていた。

「ス、スポットライト……？」

「いつの間に天井にあんなものがっ！？」

天井裏の一部がはがされ、なぜかそこからライトが顔を出していた。

シュバツ

「い、痛いですー」

入り口から走った赤くて丸い塊がよーこ先生の足首にこつんとぶつかった。それは赤い絨毯だった。

コツ、コツ……。

冷たい足音に生徒達が視線を扉に向けると、教卓に向かってしずしずと歩く金髪の少女がいた。制服じゃなくてドレスを着ている。少女が歩くたびにスポットライトの光は少女のために動いた。

「頭にドリルが生えている！　しかもツインだ！」

口ボ好き男子がとんでもないことを口走った。

ドレスの少女の眉がぴくりと動いたかと思うと

ガタガタガタッ！

「うわ、なんだお前ら！　俺をどこにつれていく気なんでしょうか！？　あつやめて、やめてください！　アッー！」

などという騒音が響き、しんと耳に響くくらいの静けさが訪れた。

暗くてよくわからないけどわかりたくもない！

「^{みのた}蓑田。椅子が遅れてましてよ？」

ドレスの少女が華麗に指をぱちりと鳴らした。

「ハッ申し訳ありません、お嬢様」

いつの間にか少女の後ろに控えていた黒服の男（髭。ダンディ）がきらつきらに飾られた椅子を教卓の横に音もたてずに置いた。

少女は椅子に座り、蓑田と呼ばれた男はよーこ先生の頭の上に乗ったままのチョークを一本拾いあげ、機械が書いたかのように整った文字を黒板に書き上げた。

「き、きたからいん、えーと……」

「貴宝院　るるあ（きほういん　るるあ）ですわっ！　それくらい読み上げなさい、この薄汚い愚民！」

「すいません、ありがとうございます！」

叱咤された男子生徒は思わず心からの礼を叫んだ。お互いに幸せならそれでいいじゃないか。

だけど一人だけ、怒りに椅子から立ち上がった生徒がいた。

「そういう言い方ってないと思うよ！　転校生なんだよね？　これから同じクラスになるんだから、薄汚い豚のような愚民だなんて言っちゃだめなんだから！」

そこまで言っただけ。

ファーストインパクトのせいで呆然とした生徒ばかりの中、梨矢なるは目の前のるるあをキツとにらみつけた。

「あなたは梨矢なるですわね？」

「そ、そうだけどっ、なんでばくの名前を知ってるんだよっ」

「それは私も——^{わたくし}これをやるからですわ」

ずっと左腕を差し出するるあ。そこにはおなじみワーパラバンドがはめられていた。ネコ型ではないが宝石でデコられた特別製だ。

「き、貴宝院ってワーフェスの共催をしているところですよ……！」

思い出したのか、ゆうひが小さく叫んだ。

「説明ありがとうございますわ、愚民。私、ワーパラのポイントラ

ンキングを見まして梨矢さんのことを知りましたの。ら、ランキングですとあなた、いつも私の上にありますから、す、少しだけ気になってましたのよっ！ だから貴宝院カンパニーの力を使ってあなたのことを調べて転入してきましたのよ！」

「すっごい無駄なお金の使い方だよっ！」

「無駄遣いこそ貴族のたしなみですわ。それより梨矢さん、あなたワーフェスに出ないおつもりですって？」

「ど、どうしてそんなこと知ってるんだよ」

「調べ上げましたの」

「にや——っ！？」

出ないと言ったのはショーウィンドウの前と店の中だけ。どっちのことを聞かれていたんだろう。どっちであっても知りたくない。「だから私、あなたに直接ワーフェスに出るように言いに来ましたの。さあ、この貴宝院るるあが言うんですのよ？ 答えは決まったも同然ですわよね」

「いやだよ、絶対にいや！ ノーノーノー！」

「なんですって！？ 愚民のくせに私に逆らう気ですの！？」

「えっと、貴宝院さんなんだかすごーい自己紹介ありがとうございましたあ。梨矢さんとお知り合いみたいだから席は梨矢さんの隣でいいですよね」

空気を読まずに、よーこ先生は転校生の席を決めた。

「え、ええ〜〜〜っ！ 先生、ぼくこんなのと知り合いじゃないよっ！ 今までの話聞いてたの？」

「そ、そうです！ な、なるちゃんの隣のベストプレイスは私の場所なんですっ！」

「鹿島さんは梨矢さんの後ろの席でいいですかあ？」

「う、後ろ……なるちゃんのかわいいお尻の後ろ……は、はい喜んで！」

「おほほほほ！ 自分から譲るなんて平民にしてはいい心がけですわっ！」

「もう転校生と仲良くなつたなんて先生うれしい……！」

よーこ先生はハンカチを取り出し、自然に浮かび上がった涙をふいた。

「いい話にまとめあげないでせんせーっ！」

いつの間にやら周りの机はガタガタと動かされて席替えが終わっているし、もはやなるには叫んで突っ込むしかやる事がなかった。
「ところで貴宝院さん」

「なんですの、先生」

「学校では制服を着てくださいねえ。それとお、保護者の方は授業参観の日以外は教室には立ち入り禁止ですう」

窓の外に張られた遮光カーテンは取り払われ、ドレスを着ていたるあは制服へと着替えた。ただしフリルがついた特注だ。執事の蓑田の姿は今のところどこにも見えない。

そしてなるは新しく隣の席になったるあから若干距離をとりつつ、反対側の教室の窓をずっと見ていた。

第一印象は悪かった。だけど顔も見たくないほどるあを嫌ってるわけじゃない。

「……見てる……ぼくのことずっと見てるよ……」

じいじいじいじいじいと穴でも開いてしまふかの勢いでるあなるを見つめていた。なるは気付いていないが別の熱い視線が背中（というかお尻）にも向けられている。

しかもるあは洗脳でもするかのように

「……ワフエス……ワフエス……ワフエス……」

と同じ単語をくり返しつつ言っている。

「ううっ大会なんて出なくても困らないし、絶対に出ないもんっ」

「あのー、梨矢さんと鹿島さんと貴宝院さんは授業中ですから前を見てくださいね？」

新しい転入生が来た、としか聞かされていない国語教師はとりあえず教師としての勤めを果たすために注意してみた。教師としてのプライドが揺らぎそうだった。がんばれ先生！

こんな調子だからまともに授業を受けるどころか休み時間や放課後にワーパラで遊ぶこともできず、いつもよりだいぶ早い時間になるは家に帰ることになった。

「おかえり〜、なるちゃん！」

毎日毎日飽きもせずママはなるに抱きついてくる。

そんなママを押し返すことも忘れ、なるはパパとママ以外に誰もいない店の中をきよろきよろと見渡した。

「た、ただいまっ！……あの、誰か来てたりしないよね？」

「まだ準備中だからお客さんはまだよう？」

「う、うん、お客さんじゃないんだけど……」

じゃあ昨日のことはどこで聞かれてたんだろう？

考えれば考えるほどなるは寒気がしてきた。

「ところでなるちゃん、あのね、大切な話があるの」

「大会なら出ないってば！」

昨日どころか教室でもるるあにさんざん言われたのだ、ますます出ない決意を固め、なるは反射的に叫び返した。

「うっん、そうじゃなくて……実はうちには一千万の借金があるのよ」

「ええっ！？」

知らなかった。

不況の中にありながら新しく店を三つ出すほどの人気はあるし、おこづかいには月に千五百円ちゃんともらっているし、週に一回はケーキを食べているし、家の中が苦しいだなんてなるは思ったこともなかった。

「昨日なるちゃんが『家が苦しいならともかく』って言ったときはじゃあこの手で行き、じゃなくて今まで隠していたことがバレてしまったのかと思って……でもなるちゃんの生活に関わることだもの、

やっぱりちゃんと話しておこうと思ったの」

「そ、そうだったんだ……」
「ごめんなさい、パパとママが苦しいのにはぐだけワーパラやネコベルトのことしか考えてなかったなんて……悪い子だよ……」

「うっん、いいのよなるちゃん。でもねなるちゃん、借金は一ヶ月以内に返さないと雪だるま式の利息で一億円になってしまうの」

「ええええっ!？」

「そうだよ、なる。それに借金が返せないとみんなで蟹をとる船で働かないといけないんだ。北の海は寒くて辛いぞ」

開店の準備をしているパパがカウンターの向こうからなるに追い討ちをかけてきた。

「さ、寒いのだよ……!」

「ああッパパ! パパはいつも暖かいコンロの前にいるから北の海なんて行ったら凍えて死んじゃうわ!」

「ああッママ! 君のうちたての麺のように白い指が赤く切れるところなんて、見たくないよ!」

カウンターをはさみながらママとパパはひしつと抱き合った。まるでこれから引き裂かれるロミオとジュリエットだ。しかもちら、と何か言いたげな視線を両方ともなるに投げかけている。

「……わ、わかったよ、大会出てみるよっ」

「優勝は?」

「できるだけがんばって……」

「優勝しないと借金が返せないのよ? なるちゃん、北の海には白熊がいるの。なるちゃんのように小さくて可愛い子は白熊さんにとつてはすごくおいしそうに見えるんじゃないかしら……」

なるは北の海にいるという白熊を想像した。なぜかその白熊はるあが熊の気ぐるみを着た姿だった。そのるるあに頭からぱりぱりと食べられてしまう自分……

「ゆ、優勝するよ!」

「さすがなるちゃん、いい子で家族思い! がんばって優勝して世

界一周旅行に行きましようね！」

「あれ？ 借金返すんだよね？」

「そ、そうだよ！ つまりママはだね『借金を返したら今度は世界一周旅行にいけるくらいがんばって働きたいわ』こう言ってるんだよ！」

「そうなんだ、うん、わかった！」

と、いうわけで。

「ワーフェスに出て優勝して一千万もらっちゃうよー！」

こうしてなるはワーフェスに出場することを決めた。

バルバルバルバル……！

「な、なに？」

出場を決めた瞬間、どこから飛んできたヘリが店の上を旋回する音が響いた。

『聞きましたわ、聞きましたわーっ！ 梨矢さん、ワーフェスに出るんですのね！』

「き、聞いてたって、どこだよーっ！？」

『我が財閥の力を持ってすれば容易いことですわ、おほほほほほ』

「こ、答えないでよう、ううう……！」

まったくもっていやな財閥の力である。思わずなるは口を手で押さえた。これからはトイレや風呂に行くのも嫌になりそうだ。だがトイレを我慢するとどこかの誰かが喜ぶことになるぞ、なる！

『私の望みはただ一つ！ 梨矢さんを大勢の目の前でぎったんぎったんにすること！』

「ひどいよ！ さっきの話聞いてたんだろ！ うちには一千万の借

金があるんだよ？ 蟹を取る船に乗らなきゃいけないんだよ！？」

『おほほほ、そんなこと私は知りませんわー。』

と、に、か、く！

出場は決定ですわ、私が直々に書類を送付しておきましてよ、おほほほほほ！！」

高笑いと共にへりの音は小さくなり、消えていった。

「……………ふ、ふふ……………」

「な、なるちゃ、ん……………」

肩をふるふると震わせ、下を向いたままのなるにママはおそろおそろ声をかけた。

「ぎったんぎったんにするのはこっちなんだから——っっ！！！」

優勝して一千万をもらう以外に目標ができたのであった。

ワーパラフェスタ開催のお知らせだよ

ワーパラフェスタ開催！

大人気のワーパラでみんなとバトルだ！

バトルステージは葉須留市全域。試合経過は生放送で全国放送！
三日間にもわたる熱いバトルに奇跡は起こるのか！？

君の熱いパズルスピリッツを燃やせ！

プレイヤー登録はWEBで行っております。携帯電話もしくはパソコンからのご登録お待ちしております。

大会は祝日を含め三日間かけて行われます。宿泊施設はこちらで用意いたしますのでご安心ください。

未成年の方は保護者の許可をとってからご参加ください。

大会は葉須留市全域で行われます。一般の方にご協力いただいて大会が開催できていますので、万が一トラブルのようなものを起こした場合、即失格といたしますのでご了承ください。

優勝賞金：一千万円　その他豪華賞品そろってるよ！

主催：ワーパラ開発チーム　共催：貴宝院カンパニー

2 ロードランナーは君だ！ ― 1

ワーパラフェスタは全国、いや全世界のワーパラプレイヤーに注目されていた。

なにせ賞金は一千万、一攫千金を狙うにはふさわしい額だ。

それだけじゃない、実はワーパラ公式による大会はこれが初めてだったりする。賞金だけでなく自分の強さを確かめるために出場を決めたファイター達だって多い。

「このままじゃ負けて北の海に行かなきゃいけなくなるよね……うつうつ、よーし！ 大会に向けて練習するぞーっ！」

「が、がんばってください、なるちゃん……！」

などと意気込むのであったが……

数時間後。

そこには駅前のベンチで激しく落ち込んでいるなるの姿があった。隣のベンチから平日の昼間なのにスーツを着た男が共感するような視線を投げてきていた。いや、あんたとは絶対違いますから。

「ま、まさか戦ってくれる人がいないとは思いませんでした……」

「うつん、戦ってくれる人がいてもぼくより強い人はこの街にはいないんだもん……」

弱い相手と戦っても得られるものはほとんどない。大会のときにはいるだろうがそれでは遅すぎる。

「き、貴宝院さんなら、なるちゃんと同じレベルじゃないですか……？」

「やだよ！ だってあの子は大会でぼくがぎったんぎったんにするんだもん。敵に情報を渡すようなことはしないよっ！」

だがなるよ、君の私生活はきつと財力のおかげでだだ漏れだ。

「うー、電車でGOして遠いとこまで行こうかなー」

しかし駅前の時計はすでに四時をしめていた。今から他の街に

行っていたのでは帰ってくるのがだいぶ遅くなる。遅くなればあのママとパパがどんな行動することやら……

『なるちゃん！ 私のなるちゃんが帰ってこないの！ なるちゃん！ なるちゃんああああああああんんん！！』

『落ち着くんだ、ママ！ 今包丁持ってくるから一緒に探しに行こう！』

「そんなもの持ってお外出ちゃだめーっ！」

「な、なるちゃん……？」

「はっ」

思わず想像の中のママとパパに怒鳴りつけていた。何事かと駅前の人々がなるの方向を見ていた。

「だ、大丈夫！ ちよつと疲れてるだけだから、あはは……」

「なるちゃん……」

慌ててごまかすも、隣のゆうひまで何やらかわいそうな人を見る目で見つめてきた。なるは思わず顔をうつむかせて周りから視線をそらした。

「聞き覚えのある声が聞こえたから来てみたが、やはり君か。どうした？ あのときみたいに誰かに絡まれたのか？」

「あつ、あやめさん！」

知った声に顔をあげればそこにはあやめが立っていた。あのとくと同じように竹刀とスポーツバッグを持っている。部活帰りなんだろう。

「あ、あの、違うんだよ、ちよつとワーパラの練習相手を探してて……」

「練習相手？ 実は私も探しているんだ」

そう言いながらあやめは自分の右腕に新しくはめているものを見せた。

ワーパラバンドだ。

始めたばかりのプレイヤーなら誰でももらえるシンプルなデザインの物だ。

「だがどうすれば対戦相手を見つければいいのかさえわからなくてな。はじめたばかりで弱いだろうが、教えてくれるとうれしい」

「な、なるちゃん……」

どうするんですか、と言いたげにゆうひはなるを見つめた。なるが探しているのは練習相手に相応しい相手。始めたばかりのあやめがそうだとは思えない。

「あやめさんにはこないだ助けてもらったもんね。うん、いいよ！
ぼくが練習相手になったげる！」

「ありがとう。恩に着る」

「それにあやめさんは剣道が強いからきつともものすごく強くなるって思っんだ！」

もちろんこれはお世辞じゃなく、なるの本心だ。

運動神経で言えばなるも悪い方じゃない。好きな科目は体育と数学と給食という典型的どこかの主人公のような性格だ。主人公だが、
「じゃあパラドックスバトルスタンバイ、だよ！」

ワーパラはバンドにつけている端末を操作することでホログラムディスプレイを浮かび上がらせることができる。

またバンドとは反対の手にワーパラ専用の手袋をはめ、ホログラムでできた擬似コントローラーを操作する。手袋はバンドとは別に持ち歩くことができる。なるはいつもカバンの中に入れている。

「ここまではわかるのだが……」

いくつかの選択が浮かぶディスプレイをながめ、あやめは難しそうにうなづいた。

「対戦相手を探したいときは対戦モードにするんだ。そしたらホログラムディスプレイで一キロ以内にいる対戦相手のことがわかるし、

十メートル以内に対戦モードにしてる相手が来たら音で知らせてくれるよ」

説明しながらなるは自分の前に横平行に浮かび上がっているホログラムディスプレイを叩いた。

軽い音と共に選ばれる『VS MODE』の文字。

あやめもなると同じ文字を選んだ。

同時に二つのディスプレイに周囲の地図が表示され、お互いのステータスらしきものも示された。

「なるほど。わかった」

「ここでOKを押したら相手が決定されるんだ。ワーパラはパズルゲームだけど、パズルの種類はいろいろ選べて自分でカスタマイズもできるんだよっ、てこれはあやめさんも知ってるかな？」

「いや、実は最初を選ぶものしかやってないんだ。……よくわからなくて」

「じゃあカスタマイズはこのままでいいね。大丈夫ならまた二人でOKを押せば対戦スタート！」

「こうか？」

ピコン！

『NARU VS AYAME』

ホログラムディスプレイに二人の登録している名前が並び、なるのレクチャーを兼ねた対戦が始まった。

——アクションパズルとは。

純粋なパズルゲームとは違い、シンプルなルールのもとキャラクターや増えるパーツを操作して変化し続けるゲームフィールドを支配しなければいけない。

いろんなルールを持ったゲームはあるが、多くのアクションパズ

ルには『連鎖』という言葉が登場する。

ルールにのっとりパーツを消すと対戦相手をそれなりに邪魔することが出来る。多くは新しいパーツを相手のフィールドに落とす。そして続けてパーツを消す、つまり『連鎖』を行うことでより強い攻撃を与えることができるわけだ。

わからないなら買え。わかってても買えばいいんじゃないかな！
「むむむむ、思ったとおりだけどあやめさん結構強い……」

初心者なあやめ相手のはずなのに、なるは意外と苦戦していた。
あやめの連鎖は一回以上続いたことはない。なのに操作が早いから連鎖も早い。

わざと強い連鎖を出さずに軽い連鎖を早めに出すことで相手を邪魔する攻撃方法だってもちろんあるわけだ。

が、やはり経験の差というべきか、なるの勝利で終わった。

「やはり君は強いな。いや、私が弱いだけかもしれない」

慣れぬ闘いに疲れたのか、あやめの額にはうっすらと汗が浮かんでいた。

「うっん、あやめさん強かったよ。……ちょっとだけど本気出しちゃったし。でもあやめさんもワーパラはじめてくれてうれしいよ」

「……うむ、いろいろと事情があつてな……」

「事情？」

きよと、と首を傾げながら聞くなる。

「いや、なんでもない。今日はありがとう。鍛錬するよ」

ゲームのためにベンチに置いていた竹刀とスポーツバッグを拾いあげ、あやめは駅前から去った。

「事情ってなんだろ。もしかしてぼくみたいに欲しいものもあるのかなー」

もしもそれがネコバンドだったら軽く一大事である。あやめの強さならワーフェスまでにかなりの実力者になれるはずだから。

「じ、事情に関係してるかどうかわかりませんけど……」

「何か知ってるの、ゆうちゃん？」

「た、橘さん、剣道の全国大会の一回戦で不戦敗してるんです……」
「不戦敗！？ どうして？」

不戦敗ということは実力に関係なく試合に負けてしまったということだ。例えば部員の誰かが喧嘩などの問題を起こして出場停止になってしまったとか……。

「……も、もしかしてあのときぼくを不良を助けたから……？」
時系列があわないぞ、なる！

「ち、違いますよ！ その、大会の前日に交通事故にあったそうです。い、今は治ってるけど、そのときは無理をしちゃいけないって周りが出場を止めたらしくて……」

「……そうだったんだ……」

ときどき見せた哀しげな表情はそういうことだったんだろう。

「うーん、でもそれがワーパラに関係するって思えないし……」

「そ、そうですよね……」

「……一千万の借金があるから、だったらどうしよう……きっとあやめさんのすごく強くなるよ、まさかのライバル出現だよ……」
るるあのこととも思い出してほしいぞ、なるよ。

「だ、だいじょうぶです、もしなるちゃんが負けてもなるちゃんだけはうちで飼ってあげますから……」

それはなくさめになってないうえに性癖をカミングアウトしてる気がする。

「ぼくもがんばらなきゃ！」

更に強くなることを誓うのであった。

がんばれなる、隣にいる魔の手に落ちないように！

休日は早いうちから他の街に出かけ、学校ではあやめの練習相手をこなし、時にはゆうひとハンデをつけながらの対戦をした。ちなみにポイントは相手とのレベル差だけで決定するためレベルが低い

ゆうひとの対戦ではハンデをつけても一ポイントも得られない。

「ゆうちゃんもさー、もうちょっと遠慮しないでどんどん連鎖積めばいいんだよ?」

「う、うん。……でもやっぱり怖いから……」

それに大切な友人でもあるなるを攻撃するなんて、攻めるなんて、そう攻めたりタチだったりできるわけが……

『な、なるちゃん……怖がらなくてもいいんですよ……?』

『……ゆうちゃん……』

そしてゆうひの手がそつとなるの制服にかかり……（ピンク色の妄想）

「そ、そんな恥ずかしいことできません!」

「恥ずかしいんだ……」

連鎖の何が恥ずかしいんだろ、となるは疑問に思ったがわかるわけもなかった。

——そしてついに大会の日はやってきた。

空に打ち上げ花火があがり、大会が無事に開催されることを知らせた。

いつもより多くの人達でにぎわう葉須留市。大会参加者だけでなく観客や、人が集まるからと屋台を出してるおっさんまで。そして屋台を見に来た一般人まで。大会というよりもはや祭だ。

葉須留市内にある県営スタジアム。

プレイヤーの受付はこの入り口で行われている。試合そのものは街中で行われる予定だ。

「梨矢なるさんと鹿島ゆうひさんですね。受付は完了しました、はい、これどうぞ」

なるは受付のお姉さんからワーパラバンドと小さな紙切れをもらった。隣にいるゆうひもだ。

「これなあに？」

「大会をスムーズにすすめるための今大会用のバンドです。またワールド・パレードクス2のテストプレイも兼ねていますので大会後にご返却をお願いします。またクジの方は一回戦で使いますのでなくさないように気をつけてくださいね。それでは大会参加者はあちらの方へ向かってください」

「ほえー」

事務的な説明を受け、言われるがままになるとゆうひはグラウンドへと向かった。

まだ開会式には時間があるというのに、すでにスタジアムの中は多くのプレイヤーであふれていた。

「やつぱりたくさんの人が来てるんだね……」

落ち着きなさそうにきよきよと周りを見渡すなる。隣にいるゆうひも落ち着きなさそうである。

参加者以外はスタジアムの観客席にまでしか入れない、つまりゆうひもワーフェスに参加することだ。

「なるちゃ~~~~ん！ 優勝、がんばってね——！！ あ、

お昼は一緒に食べましょう！ お弁当たーくさん作ってきてるの——

——っ！！ なるちゃんのーだーいすきなー、花丸ハンバーグもい——っぱい作ってきてるからね——っっ！！」

観客席からぶんぶんと手を振っているなるママの姿が見えた。

「ママ！ 運動会じゃないんだからやめてほしいよ——」

「あ、あそのモニター、なるちゃん映ってますよ……た、たしかこれ全国放送だって言っていました……」

スタジアムの上部に設置されているモニターをゆうひは指差した。そこにはどこかをぱかと凝視しているなるとゆうひの姿がはつきりと映し出されていた。しかも画面の右上には『生放送中！』なる文字まで。

「えっ、や、やだほんとだっ！ は、恥ずかしいよう……！」
モニターの中なるもシンクロするようにもじもじと恥ずかしがった。

「で、でも、大会だともっと多くの人に見られるんですよ……こ、こんなところで恥ずかしがってたら……」

「いったいどんな姿を晒してくれるというのか。」

興奮で今晚眠れなくなっちゃよう！

「……そうだよ、大会だともっと多くの人に見られるんだよね。優勝するのにこんなところで恥ずかしがってちゃいけないよね！ うん、ゆうちゃんありがとう！」

ゆうひの言葉になるは、大会が始まる前にしんなりと萎えかけた心を奮い立たせた。

こんなところで恥ずかしがってるようじゃ優勝なんて狙えるわけがない。

「……ど、どういたしまして……」

とんだ計算違いだ。言わなければよかった、と心の底からゆうひは後悔した。

「どうやら怖気づかずに来てくださったようですね。まあ、そこだ・けは褒めてさしあげましょう」

「むっ！ そのいかにもすぎて最近じゃ絶滅危惧種になってるお嬢様しゃべりは！」

なるが振り向いた先には、ああやっぱり、転入してきたときよりずつと派手なドレスを着たるあと、謎の怪しい男が立っていた。黒服にサングラス、全身から『怪しい』というオーラを放っている。まだ伸びたシャツにジーパン、皮手袋バンダナを装備している向このオタクの方がマシなレベルだ。

「はい、こんにちは。君が梨矢なるちゃんだね」

にこやかに、というよりにやにやとほくそ笑みながら男はなるに声をかけてきた。なるは心の中で『にげる』コマンドを入れていた。もちろん逃げ道はふさがれている。

「ねえ貴宝院さん、この怪しいおじちゃん是谁？　こんな人と一緒にいちゃいけないよ、貴宝院さんお金持ちのお嬢様なんだし」

あまりの怪しさに、ライバル相手だというのになるは心配してしまった。

「お、おじちゃんなんて失礼な！　おにーちゃんです、絶対におにーちゃんです。さあ続けてください、お・に・い・ちゃ・ん」

「お、おにーちゃん……」

怪しい男の勢いに飲まれて思わずおにーちゃんなんて呼んでしまふなる。男は満足そうに親指を立てた。

「ぐっ！　それでいいのですよ。……ではなく、『ミスターパズラー』とでもお呼びくださいな。ふっふっふ」

「……やっぱこんな人のそばにいけないよ、おまわりさん呼んでこよっか？」

「その必要はありませんわ。この方はワーパラ開発チームの一人なんですのよ。いくら見た目や言動が怪しくてもそんなことで判断してはいけませんのよ」

「見た目や言動が怪しいのなら判断するには十分だと思うんだけど……。とにかく怪しすぎるよ、絶対貴宝院さんを裏切ってラスボスかなんかになるタイプだよ」

「あなたの勝手なイメージを押し付けないでください！」

ミスターパズラーが吠えるけどもちろん誰も聞いちゃいない。

「……なるほど、わかりましたわ」

納得いったかのようにるあは目を閉じ、呟いた。

「わかった？　じゃあさっそくおまわりさんに……」

なるは安全のために持たされている防犯ベルと、携帯電話を取り出した。

「ちょ、ちょお——っ!？」

慌てふためくミスターパズラー。

「梨矢さん、あなた私と戦うのが怖いのでしょうか！　ですからこの方がラスボスになるだなんて妄言を言うのですね？　このような見

2 ロードランナーは君だ！ - 2

キーンと拡声器の電源を入れた独特のノイズが周囲に響いた。

『ワーパラプレイヤーの諸君！ パズルスピリッツは燃えているかあ——っ！！』

「おおおおおおおおおっ！！」

『今！ ここで！ ワーパラプレイヤー達による熱き聖戦が幕開けるっ！』

「おおおおおおおおあああっ！！」

『ぶつかれ魂！ 砕けよパズル！ 頂点までたどり着けるのはたった一人だけ！！ つまり！ それは！ ワーパラキングのあかしいいつ！！』

「テンション高すぎでうるさいよ……」

びりびりと響く鼓膜を守るため、なるは耳を押さえた。

『ワーパラフェスタ、かいつ、まくっ、だあああああ——っ！！』

「おおおおおおおおあああああああああああっ！！」

弩級の雄たけびに包まれスタジアムは震えた。大きな音に耐えるために目をきゅつと閉じたなるはゆうつひから見れば、そう大勢の男達に弄ばれる表情のようでもあった。

『えー、それでは、大会共催でもある貴宝院カンパニーご令嬢、貴宝院るるあ様からのご挨拶です』

「テンションの差激しいよっ！？」

思わずなるは叫んでしまった。

「……写めっておけばよかった……じゃなくて、ほ、ほら、あそこ、貴宝院さんです」

「ほんとだ……」

遠目でもわかる派手なドレスを着たるるあがしずしずと階段を登り、スタジアム前方に作られた特設ステージに姿を見せた。その光景はスタジアムのモニターにも映されていた。

ゴツ、ゴツ、とマイクを調節する音が響き、るるあは一度だけ「こほん」と咳をし、口を開いた。

「ワールド・パラドックスはゲームでありながら最新の技術を使ったコミュニケーションの一つとも言えます。貴宝院カンパニーはワールド・パラドックスに新たな可能性を見出し、今大会だけでなく全面的にワールド・パラドックスを支持することを決めました。我がカンパニーの支援を受け、ワールド・パラドックスはゲーム以上の進化を必ず遂げることでしよう」

「なんだか難しい話をしてるなあ……さすがお嬢様」

あの性格だからまずは高笑いで参加者をどん引きさせるかと思っただのに。意外に常識は持っていることになるは感心した。ダメだなる、それは不良が動物と戯れているのを見て「あ、なんだかいやつかも」なんて思ってしまう現象と一緒にだぞ！

「ですが、今日はそのようなことは忘れ、私もワーパブレイヤーの一人として参加しようと思っっていますの。共催だからと遠慮なさらず、正々堂々とパズルスピリッツをぶつけあいましょう。

……それ、と。梨矢さん！ あなたに勝つのはこの私ですからっ！ せいぜい一回戦でばろ負けしないようにがんばりなさいな。

おーっほっほっほっほー！

「ひっ、ひどい、全国中継であんなふうになんて……！」
さっき感心したばかりなのに持ち上げて落とされた気分だ。

「で、でも苗字だけですから……」

ゆうひがなるをなだめる。だが。

「誰だ？ 梨矢って」

「さあ。でも共催の人が眼をつけてるんだ、もしかしたら今大会のダークホースかもしれないぜ」

「ああ、それっぽい奴にあつたら注意しなきゃ」

すぐ隣にその本人がいることも知らず、屈強な野郎達が『梨矢』の名前を胸に刻み込んでいた。

「あわわわわわわ……」

おびえるなるの姿にゆうひの胸はときめいた。

ありがとう貴宝院さん！ 貴宝院さんのおかげで心のアルバムの厚さが増えそうです！

神に祈りをささげるようにるるあに感謝するゆうひであつた。

開発者何人かによる挨拶をふくめたトークショーやグッズ販売の案内、もしものときの説明などを受け、やっと一回戦の説明が始まるうとしていた。

ちなみにミスターパズラーを名乗った怪しい男は特設ステージに姿を見せることはなかった。

『それでは、一回戦の説明をしまーす。プレイヤーの皆さんは受付のときにクジをひいたと思いますが、クジには番号が書かれてます。番号はこの街の中心街地図に対応しています』

コンパニオンのお姉さんの説明と同時に、スタジアムのモニターに葉須留市中心街地図が映し出された。この街に住むなるやゆうひにとってはよく見慣れた地図だ。

だが地図は小さなマス目によって区分けされていた。マス目には薄く数字が浮かんでいた。

「クジと同じ番号のところが皆さんの出発地点です」

「えーと、ぼく病院の近くだね」

「そ、それだと私の反対側になります……せつなくなるちゃんのために出場を決めましたのに……」

『すでに知っている方もいると思いますが、一回戦は勝ち上がり方式です。街に散らばったワーフエス参加者の皆さんと勝負して三回勝った人から二回戦に進めます。二回戦への出場権を得た人の名前はリアルタイムで更新され、このモニターに表示されます。』

負けた人はその場で失格です。また出場枠が全部埋まってしまった場合は時間内であっても一回戦を終了したいと思います』

そう、だからゆうひはなると一緒に出場すると決めたのだ。なるにわざと負ければそのぶんなるの勝利は近くなる。

「大丈夫だよ！一回戦なんかで負けないもん。すぐに勝って二回戦に行くからゆうちゃんもがんばろうねっ！」

「は、はい……」

『それでは参加者の皆さんは三十分以内に指定の場所に移動してください。わからない人はここからバスが出ていますので安心してください。なお、時間内までに指定の場所まで移動しなかった人は失格となりますので注意してください』

「うわ、失格だって！ゆうちゃん、それじゃね！」

なるは急いでスタジアムの出口に走った。

「なるちゃん……」

独り駆ける戦士を見送るゆうひ。

「なるちゃんならきつと超面白かつこいいことをしてくれるって信じてます……」

台無しだった。

さて、一人で病院近くのスタート地点に来たなるであったが。

「ゆうちゃん、今ごろどうしてるかなあ……」

さっそく心細くなっていた。

病院の近くだからか周りには結構人がいる。そして散歩中の患者や病院に向かう一般ピーパーにまぎれて落ち着きなさそうに手首を押さえてる人間がちらほらと見えた。

おそらく彼らがワーフエス参加者。

「電話は、ダメだったよね」

大会中に携帯電話を使って連絡を取ることは禁止されている。見つかれば即退場というかなり厳しいルールだ。

「う、ううん、こんな情けない姿見せたら、ゆうちゃんの方ががっ

かりしちゃうよ！」

むしろ喜んで見たがるだろうに。

『ワーフェス参加者のみんなーっ！ 準備はできたかなー！？ 受付のときに配ったバンドを対戦モードにしてくれよっ！ それではカウントダウン、スタート！』

近くに設置されたスピーカーからスタジアムでやたら熱かった司会進行の声が響いた。一緒に置いてあるモニターにも司会の顔が映っている。だけどそれは次の瞬間、カウントダウンを刻む数字に切り替わった。

ツバを飲み込み、数字が0になるのを待つワーパラプレイヤー達の早い奴らがすでににらみあっている。

3、2、1……

0！

『それではワーパラフェスタ、第一回戦——すたああああああああと！——』

「うおおおおっ！！」

「いっくよー！」

大勢のプレイヤーと共に駆け出した。ホログラムディスプレイなんか使わなくても誰が参加者なのかは熱気を感じればわかる。もしもし、そこのお嬢ちゃん」

「挑戦者！？ よーしパラドックスバトル……」

なるは端末を操作しながら振り向いた。相手が誰であろうとも構わない、どんな強者でもひるまずに相手してみせることを心に誓いながら。

「病院まで案内してくれませんかねえ」

そこに立っていたのは老婆だった。腕にワーパラバンドはない。どう見てもゲームなんてしないただの一般人だ。

「え、えっとぼくとっても忙しくてっ！ 他の人に……って他の人

「がない！？」

なるの周りにいたのはワーフエス参加者のみ。彼らは自分に鉢が回ってこないうちにさっさと逃げ出していた。なるは世間の冷たさを感じた！

「ご、ごめんなさいっ！ おばーさん別の人を探して案内してもらって……」

「そうですかい、こんなババアの頼みなんか聞けないってわけですかい……」

「違うよっ、ぼく本当に忙しくて……ってどうして横断歩道の上に寝るの！？ そんなところで寝たら車が来て危ないよ！」

「いえ無理しなくてもいいですよ、こんな年老いて若者の手をわずらわせないと病院一ついけないようなババアはここで死ぬべきなんですよ——さあ、殺すがいい！！」

カツ！ と目を見開いて老婆は叫んだ。信号で停まっていた車がパプーッ！ と盛大にクラクションを鳴らし、ババアが「殺せー！ 今すぐ殺せー！」と叫んでいる光景。

普通の人間だったら他人のふりして通り過ぎるだろうが「なるちゃん、お年寄りには優しくね」と教えられて育ったなるにはできなかった。

「さあどうするお嬢ちゃん。確かわーふえすとやらでは一般市民とトラブルを起こしたら失格になるんだろう、ひっひっひ」

「ひ、卑怯者！ なんで参加者でもないのにそんなこと知ってるんだよ！」

とんだババアに絡まれてしまった。

逃げ出したい、がトラブルを起こしたと報告されたらきつと失格になってしまう。そうなったら貴宝院には蔑まれ、ゆうひとは涙の別れをし、北の海に行って寒さに震えながら蟹を取らなきゃいけなくなってしまう……！

「しょ、しょうがないから案内してあげるよっ。べ、別におばーさんのためじゃないんだからねっ！」

まったくそのとおりだ。

「へっへっへ、ありがとよ嬢ちゃん。おっと、ババアは足腰が弱いからゆっくり案内しておくれ」

「わ、わかったよっ」

仲間になったかのように老婆はなるの後ろを歩いた。（例のファ
ンファールつき）

ただし速度は殺人事件が起きた船を歩く探偵並。

目を離せばナイフや落とし穴によって殺されてそうな気がした。

まあ、殺されるとしたら先頭を歩く、なるだろうが！

*『ここは はするしの びょういんだよ。

などと答えてくれる村人Aはどこにもいないが。

「……はあ、はあ、びよ、病院ついたよっ、もう年取ってよく見えな
いからって別の建物に入ったり、違う人について行ったりしないよ
ね？」

やっと病院についたなるはげっそりとした顔で老婆に告げた。病
院に用があるのは老婆の方なのに、看護婦が心配そうに見ているの
はなるの方だ。

「ありがとよ嬢ちゃん、お礼にいいこと教えてあげるよ」

「な、なになっ」

少しだけ期待した顔でなるは老婆の言葉を待った。

これがRPGだったらボスの弱点や秘密の抜け道を教えてもらえ
るものだが。ワーパラはパズルゲームだし、ここにはボスも秘密の
ダンジョンも存在しない。

「世の中人が嫌がる顔を見ることだけが好きな連中だっているのさ
！ それじゃああばよ！ うえっへっへっへっへ」

「あ、あっ、あ——っ！？」

老婆はあつという間に、さっきの鈍足など嘘のように、病院の前から立ち去っていった。どう見ても病院が必要そうには見えない。きつとあと百年は生きるだろう。

『さて、一回戦も半分の時間がすぎようとしているが、試合の方はどうなってますか！』

突如聞こえた声に、なるは病院のロビーに置かれたテレビの画面を見た。

そこにはワーフエス第一回戦の様子が映し出されていた。

「そういえば生放送だったんだっけ」

『はい、このモニターに二回戦出場決定者の名前がぞくぞくと表示されてますよ。……おおっと、結構いるようですねー。こうなってくると制限時間内に出場者が決まってしまうかもしれません。皆さん、急いでくださいねー』

「わああん！ い、いそがなきゃ！」

なるは慌てて病院から飛び出した。

……そしてどうにか必死に二勝ゲットした。

いつもならポイントを得るためにより強い相手を選んで戦っていたが、今回はそんな余裕はどこにもない。

そこから寄り道しかけていた男子小学生に闘いを挑んで即効で勝ちを得た。

男子小学生よ、世間というものは厳しいものだ。強いものが生き残るだけだ！

「うっ、あと一人、あと一人見つけないと失格になっちゃうよー」

ホログラムディスプレイに表示される地図よると近くにいるようだが、どうもあっちにふらふらこっちにふらふらと誰に勝負を挑むわけでもなくうろついていた。

「うーん、まるで迷子みたい」

迷子になったとしても近くににいる参加者に闘いを挑めばいいだけなのだが。

なるはホログラムディスプレイを頼りにそっちに向かった。

「きゃっ！」

ぼふんっ。

ふらふらと歩いてきた一人の人間になるはぶつかつた。その瞬間、ぼよんとやわらかく丸い物体が揺れてなるの顔を包んだ。

「わぶっ！」

反動で後ろに倒れてしまうのをなんとか耐えるなる。

だがぶつかつた女性の方は、なるよりも派手に後ろによるめいた。

「あ、ああー」

そのまま近くの雑貨店がぬいぐるみを入れていた大きなバケツの中へと後ろにダイブ。しかもその衝撃で外れた『大安売り』の札が女性の頭の上へと落ちた。

こんな連鎖的転び方をする人間は一人しか知らない。

「よーこ先生！」

「あ、あら、梨矢さん……？」

ぬいぐるみを頭に乗せながら、よーこ先生は頭を上げた。

「す、すいません起こしてください」

「ううっ」

正直急いでいるからそれどころではなかったが、よーこ先生がぶつかつた原因は自分にもある。なるはよーこ先生の腕を引っ張つた。

「……あれ？」

なるは気付いた。

よーこ先生の左腕にもワーパラバンドが巻かれているのを。しかもなるがつけているのと同じ、ワーフェス専用の端末だ。

「先生もワーフェスに参加したの？ 先生がゲームするなんて初めて知つたよ」

「それが……酔つたお友達に勝手にインターネットから登録されちゃったんですよ。だから先生、ゲームなんてやるの初めてで……なんだか興奮してる人達ばかりだし、先生もうお家に帰りたいです……」

両手で顔を覆い、よーこ先生はしくしくと泣き出した。地味なス

「ッの割にあちこちぽよんぽよんと柔らかそうな体格の女性が子供のように泣く姿。とてもすばらしいと思わないかね？」

「そっ、そうなんだ……そうだ先生！ ぼくに負けてくれたらすぐにお家に帰れるよ！ それにね、ぼくこの大会に優勝できないとすごく困るんだ……だから、お願い！」

なるは両手を合わせてよーこ先生を拝んだ。

目をぱちくりとさせ、なるの言葉を聞いたよーこ先生は燃える瞳で立ち上がった。

「わかりました！ かわいい生徒を助けるためです、先生頑張ってくださいます！」

2 ロードランナーは君だ！ - 2 (後書き)

嫌な予感しかない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3293y/>

パ！

2011年12月1日20時56分発行